

まんぜ
万瀬遺跡(本発掘調査B)

所在地 北設楽郡設楽町川向字マンゼ
(北緯35度06分43秒 東経137度33分54秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和元年6月～令和2年1月

調査面積 8,200㎡

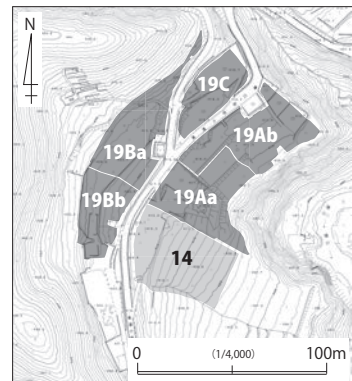
担当者 酒井俊彦・川添和暁・河嶋優輝



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、令和元年6月から令和2年1月にかけて実施した。調査面積は8,200㎡で、19Aa区・19Ab区・19Ba区・19Bb区・19C区の5区に分けて調査を行った。

立地と環境 遺跡は、境川に東面する、丘陵末端の緩斜面上に立地する。当地は大畑遺跡の立地する岬状した丘陵の付け根北東側奥部に位置しており、その反対側の南西側奥部には大栗遺跡が位置する。標高は、遺跡範囲中央に横走する県道を挟んで、410～425mを測る。この丘陵自体は片麻岩由来の岩盤によるもので、地形の凹地には第三紀以前の風化による均質な粘土層の形成が所々で認められた。



万瀬遺跡調査区位置図

調査の概要 基本層序は、上から、第1層：表土および近代以降の盛土・耕作土、第2層：中世から近世の黒色土、第3層：縄文時代早期前半以前のにぶい灰黄褐色粘土を主体とする遺物包含層、第4層：黄褐色粘土および礫層(地山)、であった。調査区内は概ね西側(山側)から東側(境川側)に向かった緩傾斜地ではあるものの、西側から東側に向かった幾筋もの谷地形が刻まれており、それを挟んだ高まりごとに土地利用のあり方に相違が認められる。

確認された、遺構・遺物は下表の通りである。

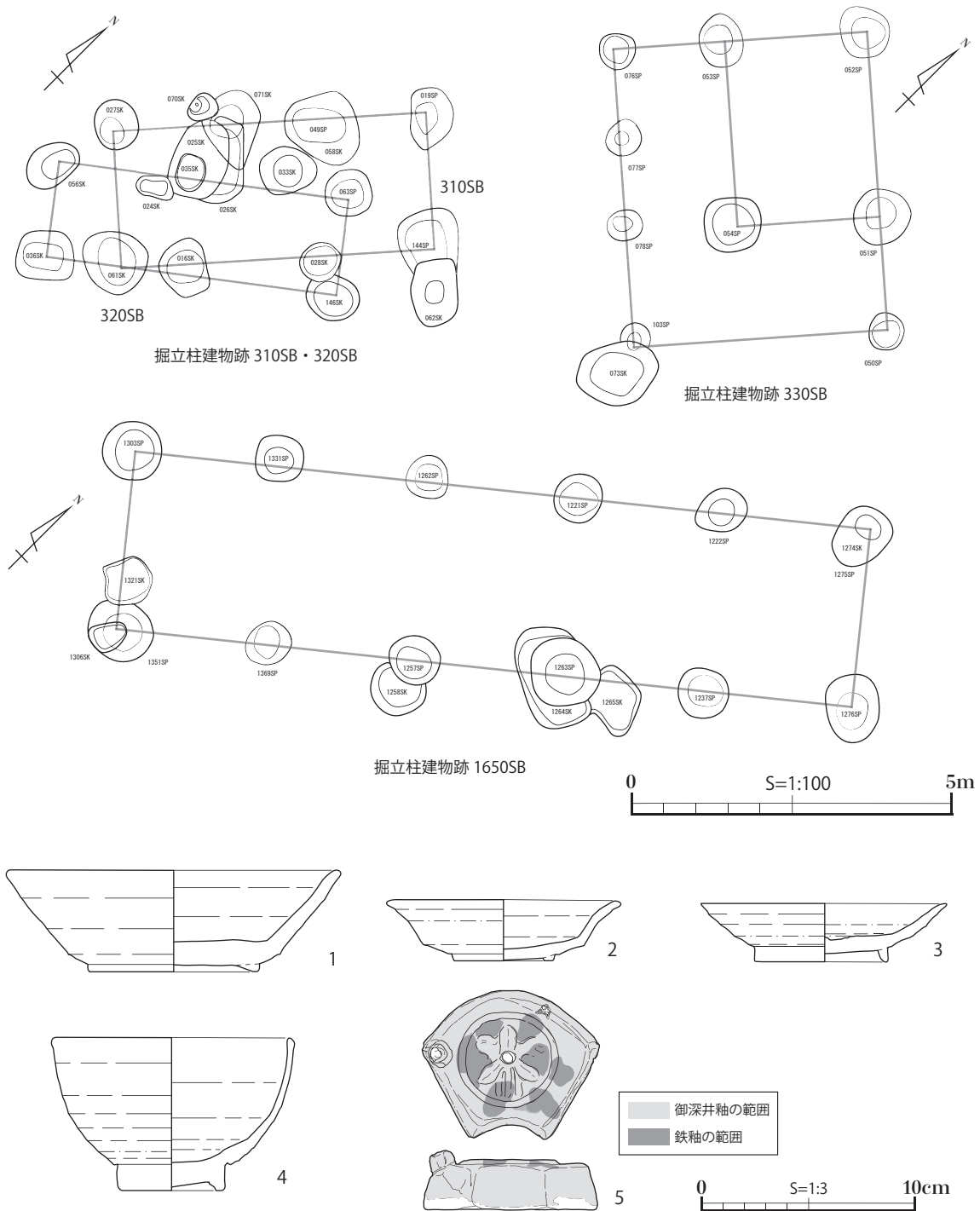
時代・時期	確認調査区	検出遺構	出土遺物	備考
縄文時代草創期1	Ab区		有舌尖頭器・木葉形尖頭器	狩り場か。
縄文時代草創期2	Ab区	土器横位出土遺構1	表裏縄文土器	当地での活動形成の始まり。
縄文時代早期前半	Aa区・Ab区・Ba区・C区	竪穴建物跡6、炉穴4、集石炉跡4、遺物包含層(捨て場)	押型文土器・捺系文土器・石鏃・礫器・剥片石核類・磨石・砥石類・石皿・石臼類	縄文時代集落形成の主体時期。地形と遺構群との関係が良好に分かる。
古墳時代前期	Ba区	土坑1	甕・高坏	
中世～近世	Aa区・Ab区・Ba区・Bb区・C区	掘立柱建物跡約10、柵列、焼土遺構、井戸、土坑墓4、その他土坑・ピット多数	陶器(山茶碗・摺鉢・天目茶碗・水滴・その他近世陶器)、土師鍋(伊勢型・内耳)、砥石、銅銭(寛永通宝)・キセル・火打金・鉄滓	倉庫と考えられる大型の掘立柱建物跡の確認。『設楽町誌』記載の郷倉とお堂に対応する建物跡を確認。
近世以降	Ba区・Bb区	谷地形内遺物堆積	土器(深鉢・注口土器)、石鏃・打製石斧・礫器・剥片・磨製石斧・近世陶器	出土遺物は、縄文時代後期～弥生時代前期主体で、近世陶器が混じる。

以下、中世以降と縄文時代～古墳時代とに分けて調査概要を報告する。なお、近世以降に形成された谷地形埋土は、出土遺物としては縄文時代後期から弥生時代前期に属するものが多いため、縄文時代の中で扱うこととする。(川添和暁)



万瀬遺跡遺構位置図 古墳時代以降中心 (S=1/600)

- 中世以降** 中世以降の主な遺構として、掘立柱建物跡10棟、柵列跡8条、井戸跡2基、土坑墓4基、炉跡3箇所が挙げられる。
- 掘立柱建物跡** 掘立柱建物跡は19Ba区で4棟、19C区で6棟を確認した。300SBは桁行4間、梁間1間以上、規模6.0m×3.0m以上の掘立柱建物跡である。ピット005SP・007SPでは掘り方内の北西側に大礫を配しており、柱の支えとして据えたものと思われる。310SBは桁行3間、梁間1間、規模4.9m×2.1mの掘立柱建物跡である。320SBと重複するが、ピットの掘り方に切り合いがなく、前後関係は不明である。320SBは桁行2間、梁間1間、規模4.5m×1.5mの掘立柱建物跡である。『設楽町誌 村落誌』（北設楽郡設楽町 2003）掲載の村落略地図には当遺構の付近に「蔵」「堂」の表記が見られ、建物の形態から310・320SBは蔵に相当するものと考えられる。ピット036SKで種別は不明であるが銭貨が出土する。330SBは桁行3間、梁間2間、規模4.6m×3.9mの掘立柱建物跡である。ピット051・052・053・054 SPの掘り方は同建物跡の他のものより大きく、この4基が建物の本体を構成し、他は廂等を構成したのと考えられる。ピット076SPでは柱痕の平面形が方形であることが確認された。建物の形態から、村落略地図の堂に相当するものと考えられる。310・320・330SBは、周辺で出土する陶器・磁器類から18世紀後半～19世紀のものと考えられる。
- 19C区で確認された6棟の掘立柱建物跡のうち、1600SB・1610SB・1620SB・1630SB・1640SBの5棟は規模約2.1～5.5mで住居としての利用が想定される。周辺の出土遺物の時期は15世紀後半から19世紀に渡り、中世から近世にかけて存続した集落跡と考えられる。1630SBは1640SBと重なっており、1640SBをほぼ同じ位置で建て替える際に桁行を2間に変更して規模を若干拡大したものと考えられる。1650SBは桁行5間、梁間1間、規模11.5m×2.8mの掘立柱建物跡である。ピット1262SPでは柱痕跡が方形であることが確認された。ピット1263SPで17世紀後半の遺物が出土し、1263SPに切られる土坑1265SKで15世紀後半の遺物が出土することから、1650SBは15世紀後半以後に建造され、17世紀後半から18世紀に廃絶したものと考えられる。
- 柵列跡** 19Ba区では2条の柵列跡、19C区では4条、19Aa区では2条の柵列跡を確認した。19C区の1680SAは1650SBと重なる位置であり、主軸方向も1650SBとほぼ一致するが、柱筋が通らないため独立した柵列跡とした。
- 井戸跡** 212SEは19Bb区南側、谷地形の肩部付近に位置する井戸跡である。掘り方内に上部は縦板、下部は礫積みで枠を構成し、最下部には加工した丸太材を組む構造で、掘り方は直径1.0～1.1mの円形でほぼ垂直に落ち込む。181SEは谷地形の内部に位置する土坑で、素掘りの井戸跡と考えられる。
- 土坑墓** 2178SZは隅丸方形の平面プランを持つ土坑墓であり、埋土から銅銭5枚が出土した。2224SZはやや胴張りのある隅丸方形の平面プランを持つ土坑墓であり、埋土から銅銭13枚、キセル1本以上のほか、骨片が出土した。以上2基に加え、近代以降の掘削と考えられる2465SDでは銭貨6枚、キセル1本が出土し、墓坑を破壊して溝が掘り込まれたものと思われる。
- 炉跡** 105SLは3.2m四方ほどの範囲で6度にわたって利用された炉跡であり、遺構埋土内には陶器・磁器片のほか、炭化物と被熱した大礫が多く含まれる。199SLは幅0.8m、長さ2.3m以上の溝状の炉跡である。1040・1116・1117・1174SLは1610SBの北東方に位置する炉跡群で、隅丸方形あるいは円形の炉跡が4基連続する。



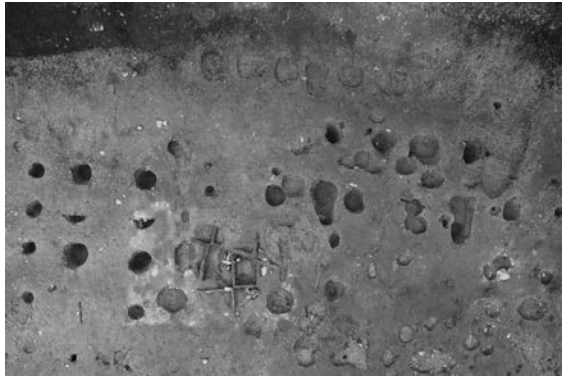
万瀬遺跡 中世以降の遺構・遺物

出土遺物 今年度調査における中近世遺物の多くは19B区から19C区にかけて出土し、特に掘立柱建跡跡周辺に多い。それに対して19A区からの出土は少数にとどまる。中世に属する遺物としては山茶碗、伊勢型鍋、搦鉢、腰折皿、平碗、端反皿、内耳鍋などが挙げられ、19C区に多く、19B区ではごく少数である。近世に属する遺物としては天目茶碗、皿、端反碗、広東碗、鎧茶碗、腰鎗碗、搦鉢、水滴、銅銭、キセルなどが挙げられる。銅銭のうち文字を確認できたものは全て寛永通宝である。

中世以降の遺物で全体が復元できたものの一部を掲載する。1は034SK出土の渥美湖西型山茶碗。復元口縁部径15.6cm、高台径8.0cm、器高4.7cm、13世紀中葉。2は1265SK出土の灰釉腰折皿である。復元口縁部径10.9cm、復元高台径4.9cm、器高2.8cm、15世紀後半。3は19B区表土出土の皿である。復元口縁部径11.5cm、高台径6.3cm、器高2.7cm、18世紀代。4は1263SP出土の丸椀である。復元口縁部径11.3cm、高台径5.0cm、器高7.1cm、17世紀後半から18世紀。5は212SE出土の水滴である。底幅8.3cm×6.3cm、器高2.8cm、扇面形で御深井釉の掛かる上面には丸に立ち沢瀉の意匠。17世紀後半。 (河嶋優輝)

古 墳 時 代 19Ba区093SKからは、古墳時代初頭の甕・高坏片が出土した。大栗遺跡でも同時期の土器片が採取されており、今後も近隣で当該時期の活動痕跡が見つかる可能性がある。

谷 地 形 内 堆 積 物 19Ba区と19Bb区の境付近には谷地形が検出され、黒色の埋土中からは縄文時代後期中葉から弥生時代前期の土器片や石器がまとまって出土した。この黒色土からは若干ではあるが近世陶器片も出土し、かつ14区では中世以降の遺構を覆っていたものである。従って



Ba区 310SB・320SB・330SBと105SL(上が西)



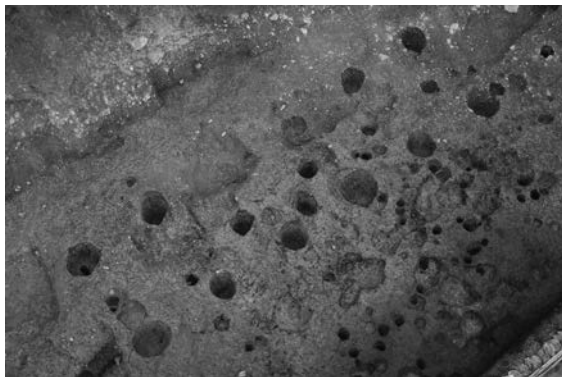
Ba区 105SL 充填された礫検出状況(東より)



Bb区 181SE 井戸枠検出状況(南西より)



Bb区 181SE 井戸内水滴出土状況(南西より)



C区 1650SB(上が北西)



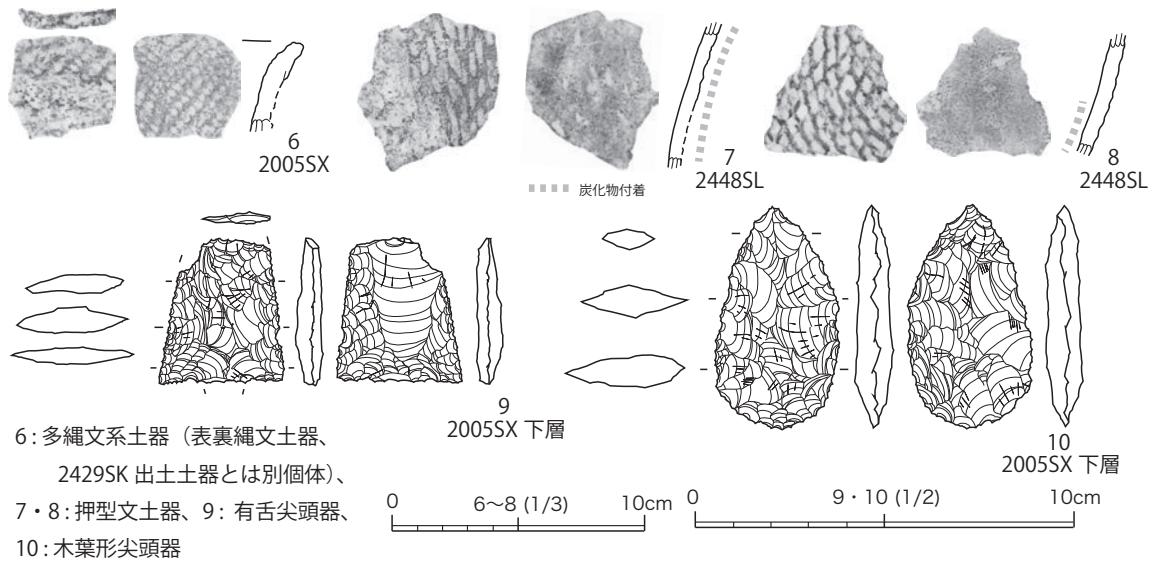
Aa区 2224SZ 銅銭・キセルなど出土状況(南西より)

この黒色土の堆積は近世以降と考えられ、縄文・弥生時代の遺物は、周囲からの二次的な混入である可能性が高いと考えられる。

- 縄文時代
早期前半
の集落跡** 遺跡範囲の北側、19Aa区・Ab区・C区にまたがる50×60mの範囲では、縄文時代早期前半を主体とする集落跡が見つかった。検出された遺構は、炉穴4基(1572SL・2116SL・2127SL・2445SL)、集石炉跡4基(2400SL・2447SL・2448SL・2449SL)、竪穴建物跡6基(1700SI・1710SI・1720SI・1730SI・1740SI・2460SI)と、捨て場と考えられる遺物包含層(2500SX)である。遺物包含層は径1cm弱の礫を多く含むにぶい灰黄褐色粘土層で、道路を挟んで19C区と19Ab区を挟んだ範囲で良好な状態で検出された。包含層の斜面上方に当たる19C区東端では、重複をした状態で竪穴建物跡が計5基見つかった。いずれも径4～5mほどの多角形を呈する平面プランで、皿状の底面を有する。中央には炉跡は認められないものの、建物跡底面や縁にはピットが複数認められた。ここでは先行する竪穴建物跡がある程度埋没してから、次の竪穴建物跡が構築された様子を確認することができた。
- 竪穴建物跡の重複**
- 炉 穴** 炉穴は平面プラン長楕円形を呈するものが多く、長軸1～2m弱・短軸0.6～0.8mほどの法量を有する。機能時の被熱部分および埋土の状況などから、いずれも複数段階での機能面が確認されている。2127SLは元来はトンネル構造を持つ煙道付炉穴であったと考えられるが、その後板石を入れるなどして構造を改変してさらに繰り返し利用された様子を確認することができた。
- 集石炉跡** 集石炉跡は4基確認したが、いずれも竪穴建物跡2460SIの埋土内であった。2460SIの建物跡としての利用が終了して、ある程度埋没した凹地状のところに、炉跡としての使用が繰り返し行われたと考えられる。炉跡はいずれも長径0.6～0.8m程度の浅い凹地状を呈するもので、焼土・炭化物を多く含んでいた。
- 捨て場** 谷地形内では、土器・石器を多く含む堆積層を確認した。にぶい灰黄褐色粘土層の分布する北東端が、谷地形としては最も深い部分に当たる。ここからは上に記した遺構同様に、早期前半の押型文土器が出土する。包含層内には、径20cm程度の角礫が固まっている場所があり、人為的な利用後に廃棄された可能性が考えられる。谷地形では、礫を多く含むにぶい灰黄褐色粘土層の下に、礫を含まない褐色粘土層の堆積があり、その範囲は谷地形対岸の北側に向かって広がっていた。この堆積土からは、押型文土器の出土もあるものの、多縄文系土器の出土も認められた。
- 礫を含まない褐色粘土層の堆積が展開する北端からは、注目すべき遺構が見つかった。2449SKは2.0×1.2mを測る浅い凹地であり、もともとは古い段階の倒木痕由来の凹地が存在していた場所であったと考えられる。その凹地内から、表裏縄文土器が一個体分、横位の潰れた状態で出土した。底部は見当たらないものの、口縁部から胴部下半まで良好に残存していた。現在、接合・復元作業が行っていない状況であるが、器壁が5mm程度と薄手で、器形などから、草創期に遡りうる可能性が考えられるものである。万瀬遺跡の縄文時代集落跡には、他にもこの時期まで遡る遺構が見つかる可能性がある。
- 出土遺物** 出土遺物は、早期前半の大川式をはじめとする押型文土器や捺糸文土器も見つかっている。2449SK出土土器の様に多縄文系土器群のなかには草創期末まで遡りうるものもあるかもしれない。石器には、石鏃・礫器・剥片石核類・磨石・敲石類・石皿・石台石類の出土があった。また、2500SXの下層からは、縄文時代草創期に属する有舌尖頭器と木葉形尖頭器がそれぞれ1点ずつ出土した。川向東貝津遺跡に近い当地は、これら尖頭器が使われた時期は、狩猟の場として利用されていたものと考えられる。(川添和暁)



万瀬遺跡遺構位置図 縄文時代早期前半中心 (S=1/300)



万瀬遺跡 縄文時代早期前半以前の出土遺物



C区 1700SI 完掘および1710SI・1720SI 検出 (南西より)



C区 竪穴建物跡群完掘削状況と東壁 (南西より)



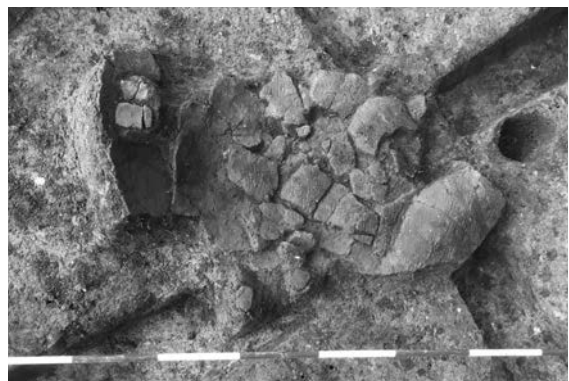
Aa区 2460SI 内2400SL など集石炉跡群検出 (北西より)



Aa区 2127SL 土層断面 (南より)



C区 1527SL 押型文土器出土状況 (南東より)



Ab区 2429SK 表裏縄文土器出土状況 (北東より)